

研究課題	五臺山を中心とする仏頂尊勝陀羅尼信仰の調査研究
研究代表者	佐々木 大樹 (仏教学部 仏教学科 専任講師)

## 1. 研究目的

中国山西省にある五臺山は、文殊菩薩が現に住まう聖山として広くアジアで信仰を集めた有数の仏教聖地として知られる。五臺山に対する人々の信仰は、文殊菩薩を中心として複合的な性格を有するものであり、「仏頂尊勝陀羅尼」(Uṣṇīṣavijayadhāraṇī) もまた、その信仰の一端を担っている。仏頂尊勝陀羅尼とは、仏陀の頭上にある「頂上肉髻相」、さらに尊格化した「仏頂尊」の徳を讃える密教の陀羅尼であり、悪趣浄化や寿命増長等の利益を期して、7世紀頃より中央～東アジアにおいて広く信仰を集めた。

『仏頂尊勝陀羅尼経』の序文によれば、仏頂尊勝陀羅尼は、儀鳳元年(676)頃、インド僧の仏陀波利(Buddhapālī)によって中国に伝えられたとされる。仏陀波利は、文殊菩薩に会うため、はるばるインドから中国・五臺山を訪れた折り、一人の老人(=文殊の化身)から仏頂尊勝陀羅尼を請来するようにとの聖囑を授かるとされる。その後、仏陀波利は、再びインドに戻って梵本を請来し、『仏頂尊勝陀羅尼経』(大正蔵No.967)を漢訳したとされる。

仏頂尊勝陀羅尼は、他にも杜行顛(7世紀、京兆出身の典客令)、地婆訶羅(Divākara、生年不詳-687年、中インド出身)、義浄(635-713年、山東齊州出身)、不空(705-774年、Amoghavajra)などによって度々漢訳されたが、五臺山の文殊信仰を背景として、特に仏陀波利訳の陀羅尼が、中国・日本等の漢字文化圏において広く受容・流行されてきた。

仏陀波利訳の仏頂尊勝陀羅尼は、その人気の高さゆえに後世、絶えず語句の修正や添加がなされたようであり、様々なタイプの「仏陀波利訳」が生まれ、併存され伝承されてきた。例えば、『大正新修大蔵経』第19巻に収録される仏陀波利訳(大正蔵No.967)には、1つの経文に対して、宋本・明本・高麗本の3種の陀羅尼が併載され、その分量や語句は大きく異なっている。さらに敦煌の文書や石刻資料類なども範囲に入れると、実に「仏陀波利訳」は多種多様であり、仏陀波利が自ら漢訳した「原本」がいかなるものであったのか不明である。

そこで本研究では、仏陀波利訳の「原本」の解明を目的とし、その方法として仏頂尊勝陀羅尼と所縁の深い五臺山および山西省内の周辺地域に現存する古い「尊勝経幢」を調査することとした。尊勝経幢とは、仏頂尊勝陀羅尼の本文を彫刻した石製の幢(はた)であり、仏陀波利の訳出年時に近い古い経幢が、五臺山周辺には数多く存在することが、先行研究で報告されている。これまでの文献学的成果を前提として、古い経幢から取得された仏頂尊勝陀羅尼の文字情報と、従来知られる「仏陀波利訳」とを比較照合することにより、仏陀波利訳の「原本」を解明することが、本研究の最終目的である。

また本研究では、古い経幢の調査の他、今後の研究展開を見据えて、あわせて五臺山周辺に伝わる仏頂尊勝陀羅尼に関わる寺院・旧跡をめぐり、その信仰実態・現状についても可能な限りの情報収集に努めることとした。

## 2. 研究方法

本研究の最終目的は、仏陀波利訳の「原本」の解明である。この目的を達成する方法として、本研究では、尊勝経幢に石刻された仏頂尊勝陀羅尼に注目し、五臺山および周辺地域（山西省）にて現地調査を実施することとした。以下、五臺山および周辺地域（山西省）における現地調査を中心に、1カ年にわたる研究過程を、(1)五臺山調査に向けての準備、(2)五臺山および山西省内の周辺地域における現地調査の実施、(3)五臺山調査の情報整理と成果発表という、3期に分けて研究方法を報告したい。

### (1)五臺山調査に向けての準備

五臺山および山西省内の周辺地域にて現地調査が、効率的かつ有効に実施できるように、『入唐求法巡礼行記』『広清涼伝』などの古記録、また下記の先行研究を参照して経幢の位置、および仏頂尊勝陀羅尼に関わる史蹟の把握に努めた。

常盤大定・関野 貞（1975）『中国文化史蹟』（法蔵館）

叡山学院（1986）「五台山特集 付録 原文五台山諸寺碑文」（『叡山学院研究紀要』9）

鎌田茂雄（1992）「清涼山記」攷一五台山における尊勝陀羅尼信仰一」（『興教大師八百五十年御遠忌記念論文集 興教大師覺鑊研究』）

愛宕 元（1999）「日中の密教交流」（立川武蔵・頼富本宏編『中国密教』シリーズ密教 3、春秋社）

佐々木大樹（2008）「仏頂尊勝陀羅尼経幢の研究」（『智山学報』57）

下野玲子（2011）「唐代前期の仏頂尊勝陀羅尼」（武蔵野大学『人間学論集』1）

上記の情報を踏まえ、牛黎濤先生（大正大学非常勤講師）の協力のもと、経幢の現存状況などを予め確認し、五臺山および周辺地域（山西省）における調査場所を絞り込み、調査行程を確定していった。

併行して尊勝経幢に石刻された陀羅尼と比較できるように、現存する仏頂尊勝陀羅尼に関する語句単位の対照表をエクセルで作成し、あわせて「仏陀波利訳」に特化した対照表も編集し、現地調査の準備を進めていった。

### (2)五臺山および山西省内の周辺地域における現地調査の実施

平成29年9月7～11日（5日間）の日程で、五臺山および周辺地域における現地調査を実施した。具体的には、五臺山上の普寿寺・七佛寺・佛光寺・尊勝寺などの諸寺、五臺山台外の岩山寺（巖山寺）・秘密寺（秘魔寺）・南禅寺、他に雲崗石窟と華嚴寺において尊勝経幢の撮影および調査を実施した。また日本国内では入手不能な五臺山に関する研究書や図録・地図を購入し、可能な限り現地の関係者と交流して情報収集に努めた。

なお仏陀波利が、文殊菩薩と会うために入住したと伝承される金剛窟については、諸般の事情により立ち入り禁止となっており調査できなかった。また年代不詳の経幢（※先行研究において唐代頃と推定）を有する五臺山上の広済寺は、工事中であったため立入ることができなかった。

### (3)五臺山調査の情報整理と成果発表

現地調査以後、五臺山周辺の尊勝経幢の撮影画像などをもとに尊勝経幢に刻まれた経文・陀羅尼の翻刻（データ化）を進め、今後、本格的に従来知られる様々な「仏陀波利訳」との比較照合を行ってゆく予定である。本研究の成果は、研究助成の期間内（1ヵ年）に大正大学学内学術発表会において成果の一端を報告したが、以後も研究の進展とともに様々な学術大会・研究会において発表してゆく予定である。

### 3. 研究成果と公表

本研究に関する成果として、まず経幢の調査・撮影をできたことが最大の収穫であり、今後、仏陀波利訳の「原本」解明において不可欠な資料となってくる。

まず五臺山上では、佛光寺にある大中十一年（857）、乾符四年（877）の経幢2基、また他にも普寿寺・七佛寺・尊勝寺などの諸寺に保存される経幢について調査・撮影を行った。その調査した経幢の中には、建幢年代が未詳のものもあるが、度重なる破仏や文化大革命の影響もあってか、比較的新しい経幢が多いことが分かった。

一方、現地調査を進める中で、五臺山台外の諸寺には古いものが多く保存されていることが分かった。五臺山台外の寺院には、普段は未公開であるという古い経幢（※建幢年代は未詳であり今後検討）が現存しており、今回特別な許可のもと調査・撮影させていただいた。

また雲崗石窟では、道脇の斜面に無数の経幢が乱立しており、意外な発見であった。残念ながら時間の制約上、また斜面という立地上、十分な調査・撮影を行えなかったが、その経幢の中には梵字の仏頂尊勝陀羅尼を彫刻する経幢もあり、大変興味深いものであった。おそらく、これらは周辺に散在した経幢が、雲崗石窟の境内に寄せ集められたものと推定されるが、今後、別の機会に調査できればと思う。

今回の直接の目的ではないが、仏陀波利と老人（＝文殊菩薩）が出会った場所に建立された尊勝寺を訪ねたことも有意義であった。尊勝寺は、比較的創建の新しい寺であり、チベット密教の影響が色濃いが、仏陀波利と老人の邂逅シーンが再現され、寺内の至る所に仏頂尊勝陀羅尼の幕が掲げられ、現代における仏頂尊勝陀羅尼の信仰実態の一端を垣間見ることができた。また台上の佛光寺、台外の南禅寺などの「五臺山文殊像」（文殊菩薩を中心に、善財童子・優填王・最勝老人・仏陀波利の五尊から成る）を実見することができ、今後の研究展開を考える上で有用であった。

また現地では、日本国内では入手困難な図書・図録・地図、例えば『五台山 佛光寺』（2010年、文物出版社）や『五台山全景図説 大朝台』（2012年、山西科学技術出版社）などの良書を手に入れることができたことも有意義であった。

以上の五臺山調査の成果にもとづき、特に尊勝経幢に刻まれた経文・陀羅尼の翻刻（データ化）を進める予定であったが、時間の制約、また経幢断面の予想以上の風化により、研究助成期間内に翻刻作業の全てを終えることができなかった。現地調査の成果の一端については、すでに平成

29年10月11日の大正大学学内学術研究発表会において、「仏頂尊勝陀羅尼と五臺山」というテーマのもと報告させていただいた。そこでは仏頂尊勝陀羅尼や五臺山の概要を示した上で、今回の調査の狙いおよび成果に触れ、今後の研究の可能性について示した。

仏頂尊勝陀羅尼は、地域や民族、言語の垣根を超えて広くアジアで受容された稀有な仏典であり、仏教・仏典がアジア各地にいかにより伝播し、変貌を遂げ、定着していったのかを解明する上でも格好な研究対象である。その「原本」を解明することができれば、そこからの展開・変遷の諸相を究明できるのであり、その成果は仏教学・文献学、また美術・考古学などへの貢献が期待される。今後も引き続き翻刻と情報整理・分析を進め、様々な学術学会にて成果報告できるように努めていく予定である。

最後に本研究を助成していただいた大正大学、また五臺山調査に関して様々に助言・支援していただいた牛黎濤先生に心より御礼申し上げたい。